

大塚節治先生をしのんで



山崎 亨

(一) 神学者としての大塚先生

大塚節治先生は、日本でまれに見る神学者であった。キリスト教界では「学者」は育たない。その理由は、少し学問をするに「先生」と祭り上げられて、ひとかどの思想家であるかのごとくに取り扱われて、その後の研究を怠るからである。

大塚先生は、大樹のごとくに深く根を張り、ピラミッドのように底辺を広げ、忍耐強く研究を積み重ねて、神学思想体形を造営した。

筆者の手もとに、昭和八年に大塚先生が講演されたときに用いたプリントが保存されている。先生は、新島会館を会場とする

牧師たちの会合で「基督教贖罪論」を講義されたが、騰写印刷のザラ紙半紙六枚つづりの梗概が用いられた。このプリントによれば、旧約と新約に現れた贖罪思想から説き起こされて、その後のキリスト教教理史中でオリゲネス、イレナエオス、トーマス・アクイナスの思想に触れ、さらに宗教改革者や、ブシユネルなどの十九世紀、サバティエ、プフライデラーなどの二十世紀初期の神学者の思想に至るまで、詳細な贖罪論の説明を、その出典の章節を明記して叙述している。

大塚先生は、神学的議論を進める際に、一つの思想が現在までのように検討され

てきたかの神学史的背景を明らかにされた。ある人々からは、大塚先生自身の考え方が出ていないとの批評もなされたが、それに対して先生は、多くの優れた神学者の思想を参考にせずに、急造された軽薄な議論を表明してみても、若い思索家を日本に育てる動力にはならない、との意見であった。

大塚先生の晩年の著作の中に「キリスト教要義」がある（一九七一年、教団出版局）。この書の第一章聖書論の第六項、「新約正典の結集」においても、古典の一つであるエウセビオスの著作が引用されて、「ヤコブの手紙」その他四書が「被疑書」とされて正典から省かれていた事実を指摘し、新約二七巻の正典公認のヒッポの会議に至るまでの経過が説明されているが、この記述は、普通の聖書緒論や概論には省略されているところである。

大塚先生の主著として挙げなければならぬのは、「基督教倫理学序説」（菊版六〇三頁、昭和一〇年、基督教思想叢書刊行会発行）と「基督教人間学」（昭和三年、全国書房）であろう。（この二書に対して、同志社大学は文学博

士の学位を贈った。

前書（以下「序説」）はバルトの聖典論に反ばくして、新約における啓示理解が、旧約におけるそれと比較になりえぬほどに相違していることを指摘して歴史主義に立つことを明らかにしている。

「序説」の第四章「キリスト教道徳と一般道徳との関係」において、議論の中心点の一つ、良心の問題を取り上げ、これを特殊能力とする立場を説明批判し、理性と同一視する見方については、カドワース、クラーク、カントなどを説明するが、そこではカントを主軸としている。このほかには良心の本体を感情とした説に言及しているが、さらに基督教における良心の概念については、旧・新約から初代教父、中世期、改革者、近代自由神学における良心論を説明している。しかし本書の中心をなすものは、最高善としての神の国の問題で、イエス、パウロ、ヨハネ、新約以後の思想を詳述している。

基督教倫理に関する著作として、大塚先生のこの著書ほどに、体系的に、詳細に論ぜられているものは、今日においても他に

比肩するものを知らない。これは、わが国においてのみならず、英独の書の中にも類を見ないであろう。

「基督教人間学」は、「全体としては罪と贖いの論理」（序文 三頁）と言うことができる。これは、基督教倫理から神学へと階段を昇った著作で、「オットー・ペールの基督教人間学」において、「神と創造」を論じ、「悪の力と堕落」を論じ、「力」は地上存在のあり方であって、それ自身として自主しない（二四三頁）と。

「ニイバアの人間学」において、ニイバアが事実性を基調として、人間を全く堕落した存在と見ず、自由にして善なる存在とも見ない、と。

(二) 教師としての大塚先生

大塚先生は、教室において教壇に立たれた姿は、厳格そのものであった。筆者などは、倫理学演習、カントの実践理性批判の原書解説の時間には、身を縮めながら小さくなって、先生の顔を正視できぬほどであった。当てられることは毎時間のようであったが、難解なドイツ語を訳するだけで精一杯で、「山崎君、何が書いてあったか理

解できましたか」と問われても、単語を日本語に訳しただけでは、返事のしかたもなかった。しかし、同級生の加藤謙爾君などと土曜夜、先生のご自宅を訪問すると、慈父のような温顔をもって、われわれの難談に耳を傾けてくださった。先生のご家庭には温室のような空気が漂っていた。

晩年にご夫人が長い患いにかかられていとき、買い物袋をさげて市場に行かれる先生を見かけたこともたびたびあったが、基督教倫理の模範のような姿であった。

昭和五十二年十二月二十九日、ご夫人が先生のおとを追うようにして、先生召天の四十日後に世を去られたが、そのご夫人の納棺式において、同志社教会牧師 寺崎氏は、ご夫人のご履歴を朗読された。その履歴は、大塚先生が生前に夫人のために書き遣された文章であったことを聞いて、その場に列席した一同の涙をさそった。先生が寄せられた夫人への愛情が切々と伝わってきた思いであった。

(三) 同志社に貢献した大塚先生

大塚先生の一生は同志社のために献げられたと言うことができる。先生は、同志社

のために身を挺して尽力された。

大塚先生の九十歳の誕生日たる一九七七年三月三日に「回顧七十七年」が上梓された。六五〇頁の大部の書である。これは先生の日記を主軸とし、同志社大学人文科学研究所の杉井六郎氏、神学部の竹中正夫教授の編集によるものであり、現総長上野直藏氏によって出版が推進されたものであった。

この回顧録を手にしたとき、二、三の点について特に注目したいと願っていた箇所があった。その第一は、大正七年前後に起こった「学園紛擾」(二〇四頁)であった。これは同志社社長原田助氏の派と、これに反対する派の二つに、教師、学生が分裂し、対立したことから起きたもので、神学部教頭の日野真澄教授は、原田派と対立する反対派の主たる人物の一人であった。

大塚先生は、神学部の若き助教授の一人として、両派の間に立って仲介のために努力をされたが、力及ばず、日野教頭は、辞表を提出して同志社を去る結果となった。

大塚先生は日野先生から学問上にも恩顧を受けられた者の一人であったので、日野先

生と行動を共にするべきであるかと思ひ悩まれ、一度は辞表を提出されたが、数日後に大いに考えるところがあつて、それを撤回された。撤回の理由として挙げられているのは、この時の争いそのものに、「職を賭して争うほどの意味がない」、と考えられたこと。第三番目に記されている理由は、先生の、「一生の使命が神学の研究にある」との自覚にあつた。この紛争の前後に、神学部で旧約担当の川中助教授は病に倒れられ、この時の事件によって島原逸三助教授は辞職され、まもなく渡辺善太教授も同志社を去り、神学部には「邦人教授としては芦田教授と助教授大塚節治だけとなった」(「私学の歩み―同志社の場合」一九六〇年、一〇四頁)。しかし、芦田教授は病気がちであつて、大塚先生だけが神学部を支えた期間があつたことを思えば、大塚先生の決断は、同志社、特に神学部のために貴重なものであつた。

大塚先生は「神の算盤」という講演集を昭和四十年に出版されている(これは昭和三十九年十一月、任期満了をもって十三年間貢献された同志社総長の職を退かれたとき、「大塚節治先生

謝恩記念事業委員会」が形成され、この委員会が主体となつて発行した。神の算盤そうばんといわれているものは、地上の人間界における計算をはるかに超越したところに、神の目から見たプラス、マイナスがあることを指摘しておられる。

大塚総長は必ずしも神の算盤だけに頼らず、組合との団交を受けたり、理事会の議を経て教学を主とする同志社の責任者としての義務を充分に果たされた。

若きころ、教壇で講義されたカントの定言命法、「格率が普遍的法則となることを、その格率を通じて汝が同時に欲し得るような、そういう格率に従つてのみ行為せよ」は、大塚先生の一生を支配した法則であつたと思う。

(大学神学部名誉教授)



大塚節治氏略歴

- 1887(明治20)年3月3日 沖田惣左衛門・コトの六男として広島県安佐郡安佐町飯室に生まれる
- 1905(明治38)年3月 日野真澄より受洗 同志社教会会員
- 1909(明治42)年3月 同志社普通学校卒業
- 1912(明治45)年4月 大塚かほる姉と結婚、大塚に改姓
- 1912(明治45)年6月 同志社大学神学部本科2学年1学期終了
- 1912(明治45)年9月～1915(大正4)年5月 ユニオン神学校 B・Dの学位受領
- 1913(大正2)年9月～1916(大正5)年6月 コロンビア大学研究科で哲学・倫理学を専攻 M・Aの学位受領
- 1915(大正4)年2月 妻かほる永眠
- 1915(大正4)年9月～1916(大正5)年6月 ユニオン神学校研究科で基督教倫理学を専攻
- 1915(大正4)年9月～1918(大正7)年8月 同志社大学神学部助教授
- 1917(大正6)年3月 宮川茂代姉と結婚
- 1918(大正7)年3月 長男肇誕生(現在同志社女子大学教授)
- 1919(大正8)年9月～1957(昭和32)年3月 同志社大学神学部教授
- 1922(大正11)年3月 長女純誕生
- 1923(大正12)年11月 大阪教会で按手礼を受く
- 1924(大正13)年4月 次男達雄誕生(現在同志社大学教授)
- 1927(昭和2)年8月 次女寿子誕生
- 1930(昭和5)年2月 三男敏行誕生
- 1932(昭和7)年8月 三女悦子誕生
- 1925(大正14)年11月～1939(昭和14)年3月 同志社大学文学部長(4期)
- 1949(昭和24)年11月 文学博士(同志社大学)の学位受領
- 1950(昭和25)年1月～1952(昭和27)年3月 同志社大学長 同志社大学研究所長
- 1950(昭和25)年4月～1957(昭和32)年3月 同志社大学大学院神学研究科教授
- 1950(昭和25)年6月～1950(昭和25)年8月 同志社総長事務取扱
- 1950(昭和25)年6月～1954(昭和29)年8月 同志社理事長
- 1950(昭和25)年8月～1963(昭和38)年11月 同志社総長 同志社理事
- 1951(昭和26)年6月～1969(昭和44)年5月 同志社評議員(4期)
- 1957(昭和32)年3月 同志社(大学)を定年退職
- 1957(昭和32)年4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
- 1964(昭和39)年11月 勲二等瑞宝章受章
- 1972(昭和47)年11月 名誉神学博士(同志社大学)の名誉学位受領
- 1973(昭和48)年10月 京都市名誉市民
- 1977(昭和52)年11月18日午後4時30分 永眠